



紀伊国屋書店のブックカバーはおなじみのデザインながら、いつもの茶色いザラ紙ではなくクリーム色のすべすべした硬い紙で、その正体は結婚相談所の広告だ。裏面には小さなモノクロ写真の中、若き日のウッチャンナンチャンが微笑んでいる。三百ページ弱かと思われる厚さで二百ページ強の文庫本。通常よりわずかに重くコシがある紙が使われていて、一枚いちまい質量を感じながらページをめくってゆくと不意にフルカラーの美しい挿画が現れる。そのたびに、小さな作品をこの手におさめているのだと私はうれしくなり、しばし手を止める。瞼に焼きつけてから眼を閉じて味わう。

この文庫本にこのカバーが掛けられたのは偶然でしかない。けれどそれらは分かち難いしっくりさでもって私の読書体験に深く食い込んでしまっており、どうにもカバーを外す気になれないのである。中学生の頃からずっとそのままの姿で私の本棚に連れ添い続けてくれているために、カバーの背だけが随分と色あせてしまった。おかげで表紙の装画は美しいまま、ほとんど見られないままである。

酒と煙草を愛し戦場に飛び込み世界中で釣りまくった著者による、道具への愛情を綴ったエッセイ。戦後間もない赤貧状況、名を馳せた後のセレブリティな交遊、ベトナムでのサバイバルや釣師ならではのアウトドア体験など、そのだだっ広いフィールドと縦横無尽ぶりに読んでいるこちらの興味は尽きない。

そして、常に寄り添い続ける「物言わぬ小さな同行者（P9）」。ライターやパイプ、ジーンズにベルトに正露丸、万年筆とナイフ、など、など。著者のお眼鏡にかなったものはもちろん、かなわなかったものたちに対しても彼のあたたかな眼差しは一貫している。

激しい思慕と歓喜、愛着。お気に入りのモンブランを失くしてしまったら原稿を書くのにどうしていいかわからないなどと、ときおり弱音を吐露する著者の姿はチャーミングであり、そこも含めてダンディでもある。

なくてはならない道具というものは、それを失う可能性があるという点において弱さにもなりうる。それが交換不可能なものであればなおさらだ。長年かけて手になじんだ替えのきかないモンブラン、その一本が消えただけで断筆必至なのだとすれば原稿執筆を生業とする者にとっては大いに問題である。だからこそ釣師の指先のような「道具としての人体、修練の果ての機能美（P198）」に憧れる。そして読み手の私は、道具にこだわりを持つべきなのかどうか葛藤する。

しかしながら本書は、こだわりと同時にあきらめが肝心であることを教えてくれている。長い旅路を共にした釣具一式を失った著者は、悲しみに暮れながらも新調した新たな釣具に、新たな魅力を発見するのだから。

この手触りのよい文庫本から私は、長くつきあい続けることで生まれる愛おしさと、いつ来るともしれない別れの怖さと、それでもなんとかなるといふ楽観を教えてもらった。

私に影響を与えた一冊、開高健『生物としての静物』。生物は「いきもの」とルビが振られているのだが私はずっと「せいぶつとしてのせいぶつ」と呼んでいる。ほとんど「たけし」とは呼ばれていない方なのだから、いいでしょ。